二十人の死亡者が続出し、翌年二月十五日脱出した者は十四人に過ぎなかった。滞在中の元気な者は田中君の他に二、三人のみとなり、病人の世話から亡くなった同志の埋葬、そして暖房の薪集め、その間には病人の栄養になる食物を買うため、中国人の雇用に働くなど年少ながら越冬組の中核となり奮闘した。

母親と祖父母を亡くした田中君は、帰国した弟妹三人を連れて二十一年十一月、戦後入植の大八洲開拓に参加した。

召集で現地部隊に入隊後、消息不明だった父親は二十三年十一月に帰還したことは、田中君兄妹には無上の救いであった。再入植した婦女子を多く抱えた開拓で、田中君は組合の建築要員として引っ張られ、大工の仕事に携わりながら酪農を営み、出勤前の早朝と、勤めから帰ったら暗くなるまで夫婦で働いた。素住台地区（田中君を含め二一戸）開拓地の移転建築が、昭和四十九年に完了したのを機会に勤めをやめ、後継者の長男と本格的に取り組んだ酪農を規模拡大するとともに、経営も長男夫婦に移譲した。

大八洲開拓も、入植五十周年を迎え大八洲神社の社殿（神殿の上屋）を造営したが、田中君は一カ月間にわたる神社建築に作業奉仕（無償）した。まことに奇特な行いの持ち主である君の側面を述べ、横顔の一端とする。

（大八洲開拓農業協同組合
代表理事組合長　石田　時雄）

一　ハルビン学院生の手記

東京都　吉　兼　三　郎

昭和十九年、戦火はようやくわが国の周辺に迫り、一億総火の玉、すべてを投げ打って祖国の聖戦を完遂せんと、軍民挙げて努力していた時代でした。私はちょうど十八歳、中学五年生（旧制）で、進学を決めねばならぬ年でした。

高等商業学校と大学予科の受験は決めておりましたが、ちょうど一月末ごろでしたか、学校の掲示板に満

州国立大学ハルビン学院の入試案内が張り出されているのを見つけました（元満鉄総裁伯爵・後藤新平創設、ロシア問題専門家養成を目的とした学校）。

日本が国運をかけて、その建国に協力した五族協和の満州国とはどんな所か、この目で見て、当時の海外雄飛の夢に魅せられた、若者の希望の大地のような気がして受験を決心した。

試験場は慶応大学で、試験官は胡麻本蔦一、川村一正先生でした。ほかに受験した高商と大学予科も合格し、同時にハルビン学院からも合格通知がきた。満州国という新しい国の魅力にとりつかれていた私は、親兄姉の反対を押し切ってハルビン学院に入学する決意を固めた。

昭和十九年四月初めに、福井県敦賀港から朝鮮の清津港行きの日本海航路の船便切符を手に勇躍出発したのでした（既に、関釜連絡船航路は、潜水艦攻撃の恐れがあるという話で日本海航路にした）。清津港で列車待ちの時間に昼食をと思い、朝鮮料理の沈菜（キムチ）なるものを、生まれて初めて食べた。出された料理が真っ赤で、口に入れてしばらくすると口の中が火の付いたように熱くなり、味も何も分からないほど辛いのに驚き、思わず周りを見ながら吐き出してしまった。私の大陸経験第一号でした。汽車は親爺殿のせめてものドラ息子への思いやりか、二等車で快適な気分で出発した。途中、満州国へ入る国境で警察官と車掌が乗り込んできて、切符と旅行目的を調べ、ハルビン学院入学のためと答えたら、すぐ次の客の方へ行ってしまった。内地の旅行では考えられない一こまで、私の大陸経験第二号でした。

ハルビン駅到着は既に夕刻、心配でしたが、先輩の方に北寮へ案内されました。

生まれて初めての長旅と気疲れで、寮に着いたときは食欲もなかった。ベッドが両側に五台ずつ十台並んだ広い部屋に、先にチッキで送った布団袋がおいてあったので、早速布団をかぶって寝てしまおうと思っていたら、先に到着していた新入生が風呂に行こうと誘ってくれた。それで、いくらか疲れは取れたようでした。ここで私の大陸生活が否応なく始まったわけです。

数日が過ぎ、少しは寮生活にも慣れてきたと思った矢先、夜中にたたき起され何事かと思えば、ファイアーストームとかで、新入生歓迎の洗礼を受け、改めて男ばかりの凄まじい熱気に驚嘆したものでした。末っ子の私にはあまり男くさい生活に馴染みがなく、オロオロするばかりでした。

北寮より片道三・五キロの道を集団で学院校舎に向かう毎日が始まった。ロシア語会話、文法、講読、ソ連経済（ロシア語）、ロシア語だけで週三十時間、その他の講座で連日大変な教科に、皆悲鳴をあげる日々が続く。中でもロシア語会話には泣かされた。「ベンキョーしなさい」で有名なポドスタービナには夜中に夢でうなされるほど苦労した。こうした苦しい中にも後日、国のために役立つロシア語を、一日も早くマスターしようと励んだのでした。

ハルビン生活にまだ馴染みの薄かったころ、私が一番好きだったのは寮の近くの植物公園でした。ちょうど木々が芽を吹き、陽光が燦々（さんさん）と降り注ぐ日曜日、必ずといってよいほど植物園に出掛けた。ベンチに腰掛け、園内を散歩する人々を眺めていると、日本人あり、ロシア人あり、満人の苦力（クーリー）が袋に簡単な生活用品を詰め込んで移動する姿など、まことに国際都市ハルビンというイメージにぴったりで、内地生活しか知らない私の目にはすべてが珍しく、平和なシーンとしていまだに記憶に残っている。若い白系ロシア娘たちは、本当に美しい。

そのころの内地では、見られなくなった派手な模様のワンピースを着て、三三五五語り合う姿には、なにか自分が場違いな世界に迷い込んだのではないかと思うほど華やいだ雰囲気でした。

そのころの内地では日曜日でも、街にカーキ色の軍服が溢れ、婦人も、男性もすべてが地味な色の着物でせかせかと先を急ぐ姿が専らで、とても街角で若い娘がこんな派手な服装で話している姿を見ることなど想像もつかないし、もしそんなことをしたら立ち所に警官にきついお叱りをちょうだいすることは必定であった。私が内地を離れて、この満州国にきたのも、一面ではそうした押さえ付けられた感じを、せめて一時で

も残された二、三年の青春をこの一見平和な華やいだ雰囲気の許される中で過ごしたくて、きたのかもしれないと思っている。

昭和十九年はこうして、日本を取りまく戦況は刻々と厳しさを増して行く一方でしたが、我々ハルビン学院生は幸いにも、毎日寮から学院校舎に通い、厳しいロシア語の勉強に打ち込んでいた。戦後、内地の学生生活を送っていた友人たちに聞いた話では、連日の米軍機による爆撃でろくに勉強にならず、十九年暮れからはほとんどの学校は、それぞれ最寄りの軍需工場に勤労動員で出かけ、事実上、学校は閉鎖の状況でした。

昭和二十年に入ると、中学生までが動員され、男女を問わず生徒たちは家から直接工場に出掛ける毎日だったそうです。我々ハルビン学院生は、午後からは軍事教練で絞られましたが、午前中はしっかり勉強していたわけで、この点は内地の学生に比べ、幸福だったと言えましょう。

ただ、さすがに五月中旬、二四、二五期五十数人に下令された、現役徴兵「五月動員」で学院生にも戦争の切迫した厳しさの衝撃を与えました。

ヨーロッパではドイツのベルリン陥落、無条件降伏となり、いよいよ我ら学院にも戦争の試練が身近に迫ったわけです。我らが知る由もないことでしたが、ドイツ降伏後のシベリア鉄道では、兵員装備を満載した列車が、極東へ連日引きもきらず輸送を続けていたとのことでした。

徴兵された同期の面々とは別に、残った私たちも七月に入ると学院裏手にあった満飛北機械製作所に勤労動員となり、私は部品倉庫の一つに配属され、召集された四十歳くらいの上等兵、三十五歳ぐらいの一等兵と年配の民間人と共に、その日の本部から届く出荷伝票の部品を工場に渡す仕事をしました。私は日本が戦争に負けるのではないかと案じていました。

既に沖縄では守備隊、住民合わせて、十何万人もの戦死者を出して、玉砕したというニュースも密かに聞いているし、心配でたまらず、また兵隊さんたちも人柄はとても穏やかな人たちでしたが、私が寮生から聞いた短波放送を伝えると、二人共眉をひそめて物思い

にふけることが多かった。

ついにその日がきた。七月の全満邦人成人男子（四十五歳以下）二十万人の根こそぎ動員令が発令されたのである。わがハルビン学院の命脈も立たれる運命の日がやってきたのであった。

終戦の日、それはとてつもなく暑い日だった。

早生まれで繰上げ召集から外され、学院寮に残った私は、同年残留二五期、一年後輩二六期生たちと、一夜にして激変した我らの行く末を話し合ったが、到底結論など出ようもなく、学院最後の渋谷三郎院長の訓示にある、「将来ある我らはなんとしても命永らえて日本に帰り、やがて春の巡りきて大和桜を咲かせるためにも頑張ろう」と申し合わせるほか、何の手立ても思い付かなかった。

ロシア問題専門家養成を目的とするハルビン学院第七代院長渋谷三郎氏は、二一・二六事件当時麻布第三連隊長で、事件の責任をとり退官、満州国治安部次長（事実上国防大臣兼内務大臣）からハルビン学院院長に転じたハルビン最高の顕官であり、厳格だが自愛溢れる畏敬すべき人物として、いまだに我らの脳裏に強い印象を残す人物であった。八月二十一日夫人と次男泰君を伴い従容として自決された。次いで最後の学監として我らと寝食を共にされた白井長助先生も、爆撃を避け、内地から呼び寄せられて間もない夫人、小学五年生を頭とする四人のお子さんと束の間の静かなハルビンの生活を味わう間もなく、院長ご一家自決後、日を置かず、ご家族六人、後を追うように拳銃自殺をされた。悲劇というか、残酷といおうか、我らは形容すべき言葉を知らなかったのである。

院長ご一家のご遺体を学院校庭に、白井学監ご一家の亡骸を南寮中庭に埋葬し、寮生は四散したのである。

私は二十六期の石井君の勧めで、やはり二十六期の佐藤彰君の家にしばらくの間厄介になることになり、当時、街中は日本人狩りで、荒れ狂う満人とソ連兵の目を逃れ、佐藤君の家の地下室で、日中いっぱいは隠れ、夜になると出てくるという生活を余儀なくされていましたが、ある日、群馬県の須田充春君が新京駅のロシア語通訳に人手が要るが、行かないかという連絡

をもたらしてくれた。いつまでも佐藤君の家に厄介になってもおれずと考えていた私は渡りに舟と飛びつき、新京駅に行くことにした。同期の横山、山本、加野、鳥取、太田、半沢らと一緒でした。

新京駅勤務中は、駅長官舎に宿舎が決まり、山森、岩佐両先輩と横山、山本、私の三人が寝起きを共にすることになった、食事、給与その他も、今思えば当時としてはとても恵まれたものでした。後で分かったことでしたが、すべて山森先輩の人知れぬご努力の賜物であったようでした。一歩駅舎を離れると、巷には職もなく、路頭に迷う日本人がなけなしの衣類や略奪を免れたわずかばかりの品物を手に、満人を相手に売買をし、その日の糧を求め、女性はすべて髪を短く切り化粧などはまるでせず、わざわざ炭を塗り、汚いモンペを履き、わずかな手間賃のために満人の手伝いをする姿が溢れていた。

駅のホームは、北満から引き揚げて南下する開拓団の人々の無残な姿で、連日混雑の極みで、身ぐるみ満人に略奪され、持ち物としては飯盒一つ、何が入っているのか小さな雑のう一つ、身は寒空にマータイ（穀物を入れる麻袋）の上と、横を手と首が出るよう切り抜き、腰を紐で縛って、寒さよけの格好、中でも駅舎の我々がとても正視できないほど、身を切られるほど悲しく思ったのは、背負った赤児がすでに死んでいるのを知らず、他人に教えられて驚愕、号泣の末、頭がおかしくなってしまった若い母親のことでした。戦争の悲劇と一言では、とても癒えない深い傷跡を人の心に刻み込む、この世の地獄絵図を見る思いでした。

頼りにする父、兄を全満邦人男子動員令で召集された後、年寄りと女、子供だけ残ったのである。開拓団の老人、婦女子らはただなす術もなく、一歩でも南に向かって歩き、南下する汽車に乗り、ひたすら体一つで、一夜で敵国人となった満人と、ソ連兵の略奪と暴力から逃れて必死の脱出を計るほかなかった。そうしてやっとたどり着いて、新京駅ホームに降りた姿が、我々駅勤務者の見たありのままの状況だった。

私たち新米の通訳は、わずか一年半の勉強、しかも怠け者の報いはたちまち現れ、連日ソ連兵から銃殺、

銃殺と脅され、初めはノイローゼ気味ではあったが、山森、岩佐両先輩の的確なご指導で、そのうちに、曲がりなりにも務めを果たせるようになりました。厄介者を辛抱強く、ご指導賜わり、改めてお二人に深謝いたします。

駅勤務が始まって数カ月後、厳冬を迎えようとする十二月中旬ごろと記憶するが、我々に一大事が発生した。あの八面六臂の活躍をされていた山森先輩がある日突然、我々の前から姿を消した。岩佐先輩がいろいろ調べたが分からぬ。「多分ゲーペーウに連れ去られた。俺も近い中に連れて行かれるな」と言う。十日もせぬうちにその岩佐先輩もある日突然消えていなくなった。横山、山本、私は青くなった。今まで我ら三人、辛うじて二先輩に元気づけられ、曲がりなりにも通訳の職務を果たしてきたが、先輩のいないこの新京駅で、一体どうやって仕事を続けられるのかと。

日ごと夜ごと、列車は南からやってくる。捕虜列車、略奪物資を積んだ列車、ソ連兵帰還輸送列車などが引きも切らず。それぞれの列車の列車長であるソ連将校は拳銃を振りかざして、自分たちの列車を最優先で発車させろとどなる。中には将官が自分の略奪物資を列車に積み、自分も同乗してくる列車もあり、こうした列車の列車長は気が狂ったように、我々を脅し、後二十分で発車させねばお前たち全員を銃殺するなどと言う。

駅には停車場司令官がいて、駅全体の輸送計画、戦利品、小麦粉をはじめ、関東軍の糧秣、薬品その他あらゆる物資、中には煙草製造機械一式、発電装置一式までも仕分けし、各方面に振り分け輸送する大事な仕事があるため、それぞれ列車長の勝手な要求を簡単に受け入れるわけにはいかないので、話はもつれる。時としては停車場司令官と将軍とのどなり合いも珍しくなかった。

もちろん、停車場司令官は将軍より、ずっと官位は下なので話は余計もつれる。しかし、ここで我々がいつも感じたことは、たとえ相手の階級が上でも、大抵は停車場司令官の言い分が通ったことで、仕事の重要性、職務権限が明確にいかなる事情より優先するとい

う彼ら共産主義国の実態を身にしみて思わせたことでした。良い悪いは別に。

この戦争のようなやりとりの間にも、私がいまだに忘れ得ないことがある。一人のポーランド鉄道兵の言葉である。年のころは四十歳ぐらい。顔も体も大きく、話し方はあまりはっきりしない発音で聞き取りにくいが、ほかのソ連兵のようにすぐ怒ることなく何度でも繰り返して言ってくれた。慣れてきたあるとき、彼が私に言った言葉。「俺はソ連が嫌いだ。奴等は自分たちを世界中で一番偉いと思っている、神よりもだ」神を信ずる彼らポーランド人の目で見たもっとも端的な表現だった、と今でも明確に記憶している。

新京駅から三月十五日以降、ソ連軍が引き揚げて間もなく、わびしいぼそぼその高粱飯にお湯をかけ、岩塩をまぶして食べていた夕刻八時ごろだったか、急に辺りが騒がしく、どなり声や金属音（身に付けた武器の擦れ合うような音）、遠くでパンパンという小銃の発射音がする。窓から覗くと（私のいた部屋は三階建てレンガ造りの二階でした）、下の街路に中共軍らしい兵隊が十数人群がっていた。同室の人が「電気を消せ」とどなった。

ソ連軍が引き揚げた直後、進駐した中共軍は本隊でなく地域の小部隊で、迫る国民党の大部隊に抵抗し得る兵力は無く、撤退するところだったらしい。一、二時間経ったと思われるころ、相当大勢の足音がするので窓から覗くと薄明かりの中、国民党軍らしい兵隊が街路の両側に散開し、小走りにやって来るのが見えた。しばらく息を潜めて覗いていると、部屋の扉をバタンと開け、血走った目付きの二、三人の兵隊が銃を構えて入って来た。「ニイ　ショマ」同室の人がどなった。（彼は中国語が良くできる）兵隊たちは銃を構えてどなり返す。何やら盛んに中国語でやり合っていたが、私にはさっぱり分からない。ただ「オーデ　リーベンレン（私は日本人だ）」という言葉だけは理解できた。しばらく睨つけ、兵隊たちは部屋を調べて引き揚げて行った。

国民党軍の中共軍便衣狩りだったようだ。これで新京市は国民党軍の治下に置かれるのかと思っていたら、

半月後にまたまた一騒動。腹は減るし、読み物はなし、早目に（八時ごろか）煎餅布団にくるまって横になっていると、バリバリという旧日本軍の重機の音、枕元の窓際にガガガと着弾の音。飛び起きて壁に張りついて耳を澄ますと、銃声の中のどなり声「前進」日本語だ。中共軍の巻き返し侵攻と想像はつくが、日本語とは一体何だろう。聞くところによると、相当多数の旧日本兵が中共軍に参加していた模様でした。

今度は国民党便衣狩りだ。待つほどもなく、バタン、扉を開けて二人の兵隊が入って来た。今度は怒声ではなく、日本語で私に「日本人かね」と聞く。そうだと答えると、そのまま静かに帰っていった。ところが二、三日後、私が一人でいるとき兵隊が二人入ってきて、「ここにいたもう一人の日本人はどこへ行ったのか」と聞く。「彼がどこに行ったか私は知らない」と答えると、「お前は何者だ。いつからここにいる」私は「ハルビン学院の学生で、新京駅でロシア語通訳をしていたが、ソ連軍の引き揚げ後は、失職してここにいる」と答えると、しばらく二人で相談していたが、日本語の分かる方が、メモに中共軍本部の住所らしいものを書いて帰って行った。想像するところ、同室の彼は国民党軍の密偵のようなことをしていたらしく、その後彼の姿は見ない。

中共軍の進駐後は新京の街も落ち着いて、日本人も苦しいながら日々の糧を求めて、相変わらず身の回りの細やかな物を売買したり、何もない私たちは、肉体労働に励む毎日が続いた。丘に上がったカッパの私は、日本人の裕福な家庭から売り食いの品物、和服、帯、置物、時計、骨董品、掛け軸、浮世絵などを預かる店の留守番兼売り子、雇われ労役。壊れた満人の家の修復、レンガ積み、ごみを集めて燃やしたり、食うためには何でも引き受けて働いた。暖かくなってもまだ春。着る物とては汚れ切った着たきり雀、着替えとて一枚もなく、見兼ねた知人の韓国人女性が父の古着だがと、衣類一揃えを渡してくれたときは、有り難いやら悲しいやら複雑な気持ちだった。

やっと四平街からの引揚げ列車に乗せられ壺蘆（ころ）島に着いたのは、昭和二十一年七月終わりごろ。引揚船に

いざ乗船というときになって単身者は港にしばらく残って、米軍軍需物資の荷揚げ使役に従事することになった。そう言えば港に着いたとき、今まで他人同士だった男女がにわかに夫婦の申告をしていた人たちがいて、不思議な感じがしたが、要領のよい人たちだったのか。また病人を抱えた者、老人、子供連れの人たちを除くすべての人たちはしばらく港で働いた。

日本から米軍軍需物資を積んだＬＳＴ型輸送船が入港して、クレーンで物資を岸壁に下ろす。様々な物資があったが、中で最も厄介なのはガソリンの詰まったドラム缶である。重さ二百キロぐらいあったのではなかろうか。慣れない我々はどうやってトラックまで運んだらよいのか戸惑う。そこで登場するのが、我々のリーダー喜屋武（きやん）さん（四十歳ぐらいの小柄でがっちりした体格の沖縄県人、長年中国で軍属をしており、終戦時は北支で軍役に従事していたが、終戦で軍を離れ、一般人として引き揚げ途中だったと聞いた）が、「ドラム缶なら任せろ」と、上の部分に両手を掛け缶を斜めに傾け、重量を利用してそのまま器用に転がして行く。見ていると案外簡単そうに見える。

ところがやって見て、その難しさに驚いた。足を踏ん張って傾けたのはよいが、転がす要領がさっぱりつかめない。二、三歩歩いてドラム缶はガタンと直立してしまう。もう一度やっても二、三歩でガタン、すこし要領がつかめたと思ったとき、重心の狂った缶が横転し、警備の中国兵がどなる「ニイ　ショマカン（お前、何しているのだ）」。私たちは旧軍の地下足袋を支給され、それを履いて作業をしたが、何分にも今までろくなものも食べていない我々は横倒しのドラム缶をもろに足の上に倒し、脛を打撲するやら足の親指の爪をつぶすやら、手の生爪を剥がすやら、けが人続出で最初は散々だったのを覚えている。

今度は、苦労して運んだ、ドラム缶をトラックに積み込む作業だが、今のようにフォークリフトなどがあればなんの苦労もないが、人力で荷台に揚げるのが、また一苦労。喜屋武さんは長い材木を探してきて、トラックの荷台に斜めにかけ、太いロープをドラム缶に二本掛け、一方の端を二人で固定させ、もう一方のロー

プを二人で引き揚げさせた。なんとも人手の掛かる作業だった。

積み込みの終わったトラックは港から一・五キロぐらいの丘の上、旧日本軍の弾薬庫らしいトンネル内にドラム缶を運び込む。荷降ろしは荷揚げに比べれば簡単で、材木の上を二人ずつで転がすだけである。ただ、慣れと不注意で材木から外れたドラム缶が転げ落ちたときは、中国兵が飛んで来てどなりつけた。トンネルの中でガソリンが引火でもしたら、それこそ一大事だからである。

昼どきになると、米軍のレイション（携行食品）が支給された。十五センチ、二十センチぐらいの長方形、濃緑色の紙箱、蓋を開くと中には乾ぱんかビスケット、チューインガム、タバコ、缶入りジュース、干し肉、中にはグリンピースの缶詰やチョコレートが入っていることもあった。旧日本軍の携行食に比べて、なんとその違いの大きいことかと、皆感心し戦争に負けた実感を改めてかみしめたものだ。

港に戻ると、軍需物資を日本から運んだＬＳＴ輸送船には、港まで我々と一緒に来た引揚者が続々と乗り込む姿が望見された。皆、着のみ着のまま、それでも手をつなぎ合って、やっとこれで祖国へ帰れるという喜びで、足取りも軽いように見受けられるのは、残されていつまでこの使役が続くやら分からぬ私たちの僻目だったのか。

ただ、舷門を通る引揚者が、なんとかここまで隠し持ってきた何かを、警備中の中国兵に見咎められ、取り上げられまいと必死に争い、つき飛ばされる姿もあり、なんともやりきれない思いをしたことでした。戦争に負けたのは軍人だけでないのだ。

こうして引揚者の乗るＬＳＴ船を作業をしながら、何度見送ったか数えるのも面倒になるほどでした。日本から到着する貨物船には、生鮮食品の野菜などを積んで荷揚げされることもあり、その荷役をするときは野菜の香りに、祖国日本の土の匂いがするかのように、鼻をくっつけて嗅いだものでした。

都会育ちの私でしたが、満州での学生生活やら、戦後の苦難のうちに何か土という物の懐かしさを思うよ

うになったのだろうか。

やはり私のように残留した学生でハルビン工大の学生がいたが、彼は日本に帰ったら北海道で百姓がしてみたいなどと言っていたのを覚えている。彼は工大を卒業したら、満州重工業に就職し、先輩たちと日本に負けないほどの重工業を発展させ、北満に一大工業基地を建設し、鉄鋼、機械、自動車などはすべて満州で生産し、中国、朝鮮、アジア地域に出荷、狭い日本はそうした製品の輸出センターとしての役割を分担すれば良いと思っていたと、若い彼らの戦争で潰れた夢を語ってくれた。私とて同じこと、夢は持っていた。こうした若者の思いは跡形もなく崩れ去り、いま労役に従事する我々が考えるのは、北海道で百姓がしたいなどと一種諦めか、投げやりの気持ちにしてしまったようだ。

ついに私も足の親指の爪を潰した。帰国後の自分の将来はどうなるのかなどと思いあぐねながらドラム缶荷役中、左足の上に倒してしまった。地下足袋のゴムが切れ、親指から血が吹き出ている。しゃがみ込む私を気が付いた喜屋武さんが抱えて、宿舎に連れて行ってくれた。

「何を考えていたのだ。もうすぐ内地に帰れるときになって」手当てをしてから彼は「若い君たちは帰ってからのことなど考えなくてよい。君たちの将来は大丈夫。ただ今は、体だけ無事内地に持っていく事だけを考えなさい」と言ってくれた。有り難う喜屋武さん。涙がこぼれてきた。こうして皆頑張った。ただひたすら内地に帰る日を待ちながら…。

苦しかった壺蘆島の使役も終わり、昭和二十一年初秋、やっと佐世保に帰り着くことができた。

思えば、在満時代一方ならずお世話になった方々のご好意と励ましのお陰があったればこその今日の無事帰還。改めて深く感謝いたします。

大村湾に浮かぶ島々の緑、海の青さが美しい。

日差しがやけに強くまぶしい。中学生のころ、教師に毎日聞かされた懐かしい言葉が聞こえてくる。「テイク」「ハリーアップ」「ゴーアヘッド」英語だ。「ダワイ」「スカレイ」でなく。なぜか涙が込み上げて止

まらなかった。なぜ、私は英語にこんなにホッとした安堵感を覚えるのだろう。ＤＤＴを全身に振り掛けられて、痩せさらばえた三十七キロの骨皮筋エ門はようやく日本に帰りました。

「お父さん、お母さん、ただいま」

長崎県南風崎（はえのさき）駅を午前に出発する外地引揚者専用列車に乗り込む。もちろん満員で通路まで足の踏み場もないくらい、網棚にまで身の軽い者、子供たちは荷物と一緒に上がり、背中を曲げてしがみついていた。

窓にはガラスなど無く、十センチの板で釘付けしてあるので外はまるで見えない。所定の停車場に止まると、人混みを掻き分けて、そこで下車する何人かは期待と不安の入り交じった面持ちで降りて行く。今までの苦難と恐怖のせいか、子供たちの顔にも笑みはなく、何か分別臭い感じさえする。外がやけに騒がしいので板の隙間から覗くと専用列車で、一般乗客は乗せないのだが、静止も聞かず乗り込もうとする人々と駅員と争って揉み合っている。皆大きな荷物を持っていて、後で分かったことだが、買い出し屋か、露天商の類であったらしい。

私の目的地、名古屋駅到着は定かではないが、夜遅く十二時近くだったかと思います。駅舎も荒れ果て、新京駅に比べても見劣りするほど汚れと破壊が目立ち、戦前のあのきれいな姿はどこにもない。引揚者の係員が「夜も更けているし、電車も動いていません。しかも駅付近は治安が悪く、毎晩強盗、暴行が絶えないので、夜明けを待って各自出発することにして、五、六時間は駅舎で仮眠して行くのを勧めます」という。私は駅舎の柱にもたれ、コンクリートの床にそのままゴロ寝する。九月でもあり、夜明けの冷気にゾクッとして目覚めると、白々と夜が開けていました。

駅前に出てみると、なんと遥か彼方まで何も無い。所々にポツン、ポツンとコンクリート造りの建築物の瓦礫、煙突が五、六本見えるのみ。名古屋市中心街は全滅だ。私の生まれ育った家はどうなっているのだろう。矢も盾もたまらず、やっと幹線のみ復旧した市内電車で生家のあった市の東南、高辻町に向かった。幸い電車はそこまで通じていた。歩いて三分。何もない。

瓦礫と焼け跡の連続。家と工場の跡に土台のコンクリートの床があるだけ。こうして見ると案外狭い感じだ。思い出した。家族は戦前、親父殿が近郊に建てた隠居所だ。日差しがとても強い。歩くこと五十分やっと着いた。間違いない。我が家だ。玄関に回るのが面倒で裏口から入る。ただいま、本当にただいま。出てきた伯母が「三ちゃんかい。まるで幽霊のようだが、本当に三ちゃんかい」。

昭和二十六年やっと早大商学部を卒業した。が、何分、当時、史上空前の就職難時代で思わしい就職口も見つけられず困っていた矢先、ちょうど大学時代ロシア語ゼミの指導教授から、今度新しく洋書輸入を始める会社で人を欲しがっていると言う話を聞き、早速社長に会って見ると、苦労を厭わぬ人物なれば二人でも三人でもきてよろしいとのこと、もう一人ゼミ仲間の友人と二人で入社する了承を得た。

以来、通算四十五年（サラリーマン十五年、独立して三十年）、洋書輸入一筋で今日に至りました。

激しい時代の変遷は、我らハルビン学院同期の運命をそれぞれ違った道に導きましたが、若き日、馬家溝北寮の彼方に沈む大日輪の雄大な姿を思い浮かべ、同じ釜の飯を食った仲間たちを思うとき、いろいろな苦労も乗り越える勇気が出てくる。誠に不思議なエネルギーを与えてくれるように思うのは私一人だけなのだろうか。

戦後五十年を経た今日、改めて感ずるのはたとえ在学一年半とはいえ、終戦と共に消滅したユニークな満州国立大学ハルビン学院は、私の忘れ難い青春の一こまをしっかりと心に刻みつけた思いで深い学舎（マナビヤ）であった。同窓生現在存命者六百余人を残すのみとなったが、このハルビン学院同窓の自治三訣（人のお世話にならぬよう、人のお世話をするよう、そして報いを求めぬよう）を旨とした生き様（ざま）は、戦中戦後を通じて彼らの心に脈々として流れ続けている。

不幸にしてソ連の捕虜となり、シベリアに連行された同窓生は牛馬の如（ごと）くに扱う、あのソ連兵に体を張って、日本兵との意思疎通の仲立ちとして働き、戦後再開した日ソ貿易でも、その先駆者として第一線に立ち、

どれだけ人のお役に立ったかは、本人たちよりも周りの人々の証言で明らかであろう。戦後、日本国外務省から責任を問われた元リトアニアカナウス領事、杉原千畝氏はナチの追及を逃れ、シベリア経由で日本に避難を求める六千人のユダヤ人に、本国の許可なくビザを発給して感謝され、その功績をたたえられて、同氏の故郷岐阜県八百津町、人道の丘公園に胸像が建立され、自らの立場を顧みず尽くした、われらの同窓杉原氏の人類愛の行為が顕彰されている。数え上げれば切りもないが、私が縁あって学んだハルビン学院とはなんと感化力ある学舎（マナビヤ）であったろうか。

齢七十になる今も、同じ釜の飯を食い、寮生活を共にした仲間と会うのが楽しいという誠に不思議な学舎であった。

【執筆者の横顔】

吉兼氏は昭和二年一月名古屋市に生まれ、昭和十九年中学校卒業後進学を志し、名古屋高商、満州国立大学ハルビン学院などを受験、そのいずれにも合格したが、当時の青年として大陸にあこがれ、ハルビン学院に進むこととした。

彼の志したハルビン学院とは、大正八年日露協会が対ロシア、ソ連の経済人を養成する目的で、当時の協会総裁後藤新平伯（関東大震災復興院総裁）の提唱により、文部省令に基づく外語専門学校（主としてロシア語）として設立され、多数の人材を送り出していたが、昭和八年満州国建国後移管され、満州国立大学哈爾浜学院と名称を変更した。

吉兼氏が入学した昭和十九年ころは、時局切迫し時代の要求により、毎日六、七時間ロシア人講師より実用ロシア語をたたきこまれていた。

当時の院長（学長）は渋谷三郎氏（二・二六事件の際、麻布第三連隊長であったので責任をとり退役、満州国官吏となり治安部次長（軍・警担当）から院長に就任、毎日学生と接しておられた。学生にも慕われる有徳温厚な士であった。

昭和二十年八月終戦、満州国崩壊、学院も廃校となり、渋谷氏は前職の関係で一家全員自決された。

この学院の卒業生の多くはシベリア抑留の難にあったが、吉兼氏は通訳として任に当たった。一方吉兼氏ら在校生は校舎から追い出され途方にくれたが、侵攻してきたソ連軍との折衝、在留邦人避難民の保護援助に当たった。また引揚げには婦女子の援護業務に当たった。

引揚げ後、改めて各大学に進学した者もいるが、ハルビンでのわずか一年数カ月の生活ではあったが、当時のきずなは五十年経た今日、なお太く交流を続けつつ古稀を迎えんとしている。

（岐阜県引揚者団体連合会
理事長　川村　一正）

わだち

東京都　太田古雄

(一) いざ満州へ

大正十年山梨県の片田舎で生まれた私は、五歳のとき父を失い、七歳違いの姉と二人は母の手一つで育てられたが、十六歳のときその母もこの世を去った。そのため学業も中断するという逆境の中にあって、人生の指針を探し求めていたとき、たまたま満鉄社員の募集があり、幸いにも採用されることになった。

そのころは、満蒙開拓の重要性が声高に叫ばれて、青少年の夢をかき立てていた。それにこたえた多数の青少年が、大陸の新天地に夢と希望を託し、陸続として渡満する時代だった。

昭和十二年八月神戸港を後に故国に別れを告げて、大陸の表玄関満州国大連に上陸したのは十七歳の夏であった。そこで「ハルビン鉄路局三棵樹（さんかじ）駅勤務を命ず、日給一円四十銭を給す」の辞令をもらった。

国際都市ハルビンは異国情緒に満ち溢れた大都会で、山梨の山村から出てきた私にとっては、驚きと興味の尽きない素晴らしい街であった。

(二) ハルビン生活が始まる

ハルビン駅から駅二つ離れた三棵樹駅の駅員となった私は、非番の日はよく友人と共に、ハルビンの街を